

おりもの 織物のまち はちおうじ



▲^{そうとあさいち}桑都朝市(「^{そうとにつき}桑都日記」^{ごくらくじ ほん}極楽寺本より)

くわ みやこ 桑の都 はちおうじ

「^{あさかわ}浅川を渡れば^{ふじ}富士の^{きよ}かげ清く^{くわ}桑の^{みやこ}都に^{あお}青^{あらし}嵐吹く」という^{わか}和歌を知っていますか？

^{へいあんじだい}平安時代の^お終わりに活躍した^か歌人・^{さいぎょうほうし}西行法師の^{うた}歌と^{つた}伝えられています。しかし、このころから「^{くわ}桑の^{みやこ}都」といえるほど^{ようさんぎょう}養蚕業(カイクを^{そだ}育てて^{まゆ}まゆをとること)が^{さか}盛んだったのか^{ぎもん}疑問であり、^{ほんとう}本当に^{さいぎょう}西行が^{うた}この歌を作ったのかは^{つき}はっきりしていません。

それから時代は^{しだい}進んで、^{すず}江戸時代の中ごろには^え八王子の^{なか}周辺は「^{はちおうじ}桑都」として、^{しゅうへん}養蚕業や^{そうと}織物^{ようさんぎょう}が^{さか}盛んになります。その後、^ご八王子は^お織物の^{みやこ}まちとして、^{ふけいき}不景気や^{せんさい}戦災など^{かずかず}数々の^{こんなん}困難も^{ひとびと}人々の^{どりょく}努力によって^の乗り越えて^こきました。現在でも^{げんざい}全国有数の^{ぜんこくゆうすう}ネクタイの^{きじ}生地などの^{さんち}産地として^{はってん}発展を^{つづ}続けています。

はちおうじ いち きいと ゆしゅつ 八王子の市と生系の輸出

江戸時代には、甲州街道沿いに八王子の宿場が作られて、横山・八日市の2宿で月6回の市が開かれます。市では、人々の生活に必要なもの、食料や織物・生系、たきぎなどの燃料が売られていました。この市に集まる織物や生系の多くは、八王子の周辺の村々で作られたものでした。八王子は周りを山に囲まれていて、こうした山あいの村では畑仕事が少なく、養蚕や機織りが大切な仕事だったからです。周りの村々から織物や生系が八王子の市に集まってきたことから、「八王子織物」と言われるようになりました。

江戸時代も終わりごろになると、それまで鎖国といって中国とオランダとしか貿易をしていなかった江戸幕府が、横浜などの港を開いてアメリカやヨーロッパの国々と貿易をするようになります。当時、外国では生系が不足していて、外国の商人は日本の生系を買いあさるようになり、生系が日本からの輸出する品物の花形となります。関東や信州など各地で作られた生系はいったん八王子などに集められて、横浜の港をめざして運ばれていきました。この時代に活躍したのが「鑓水商人」たちで、生系を大量に買いつけて横浜に運び、たくさんの財産をきずきました。

きんだいか ひんしつ こうじょう 近代化と品質の向上をめざして

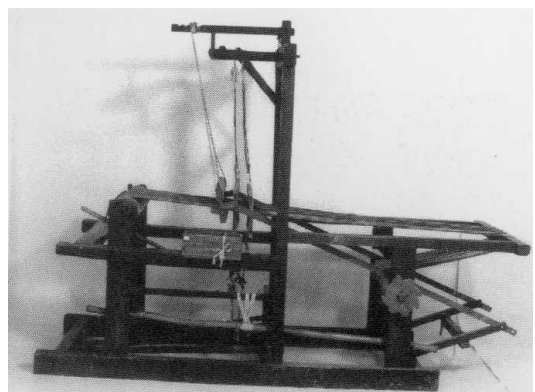
時代が明治になると、新しい政府の方針として、国の経済力を高めて強い軍隊を作る「富国強兵」という政策がとられます。そのため、さまざまな産業が近代化されていきます。

明治18年(1885年)、まゆ・糸・織物・陶器・磁器の5つを評価・審査する五品共進会が行われました。八王子の織物業の人たちも出品しますが、あまりいい成績はもらえず、大きなショックを受けます。原因は、織物を染めるために外国から輸入していた染料の品質が悪く、洗うと色が落ちてしまうことにありました。そこで、八王子の織物業の人たちは、この失敗をばねにして、明治20年(1887年)に「八王子染色講習所」を作ります。この学校では、ヨーロッパで新しい技術を学んだ先生を招いて、染色などいろいろな技術の向上につとめ、のちには国内や外国の展覧会で優秀な成績をおさめるようになりました。

て おりばた
▼手織機

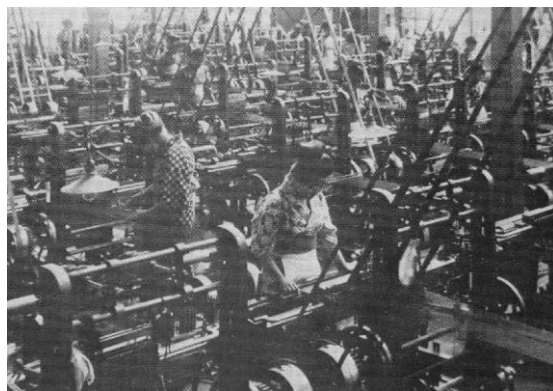
はちおうじ さんぎょうかくめい 八王子の産業革命

大正時代になると、八王子のあちこちで電気が使われるようになります。そうすると、今までまわりの周辺、川口や恩方などに多かった機業家(自分の工場で作る人たちが)、電力を使おうとまわりに移り住むようになります。それまで、手織機



といて、人が手足を使って織物を作っていたのが、動力(電力)の機械=力織機を使って、織物を作る工場が増えていきます。力織機1台で、手織機数台分の織物を作ることができ、生産力が高まるからでした。このころ、有力な機業家がお店を構えて、買継商(機業家から織物を買って全国の消費地の問屋に売る仲買い)と取り引きするようになります。

こうして、江戸時代以来行われてきた市も、大正5年(1916年)に廃止されました。



▲ 織物工場(大正13年 小林正申氏提供)

不景気にもめげず売れる努力を

大正時代中ごろから昭和の初めにかけては世の中の景気が悪くなり、物を作ってもぜんぜん売れない時代でした。こうした中、人々の服装の好みにも変化が起きます。男の人は着物から洋服、女の人はしま模様(きもの)の着物から柄(から)のついた着物などへ変わっていきました。それまで、八王子では男物の着物生地を多く作っていましたが、女の人向けの生地やネクタイの生地作りも始まります。そのほか、昭和初めごろから、海外に輸出されるものも多くなり、売り上げを伸ばす努力が続けられました。

ところが、日本が中国やアメリカなどと戦争を始めたため、海外への織物の輸出が禁止されたり、織物機械を軍隊に差し出してしまい、工場を閉めざるをえなくなったりと、織物業界は大変なダメージを受けます。そして、昭和20年(1945年)8月2日の八王子空襲で、八王子のまちなかにあった工場はほとんど焼けてしまいました。

戦後の復興から現在まで

戦争に負けて、世の中に食料や衣料品など、物が足りなくなりました。八王子の織物業界も国からお金を借りて、工場を再建するなど復興をめざします。昭和25年(1950年)に朝鮮半島で戦争が始まると衣料品などがたくさん売れ、「ガチャ万(ガチャンと機を織れば万ともうかる)」と言われるほどでした。その後、ウール(羊の毛)の着物の生地などの新しい製品を開発し、全国的に出荷されたこともありました。

年季奉公の思い出

昭和11年、小学校を6年で卒業してすぐ年季奉公に出た。28歳で結婚してやめるまで、ずっと織子として働いた。父に八王子に連れてこられたが、小さかったから、家へ帰る道もわからなかった。遠くの空を見て、あの山の向こうが家かしら、それともあそこいらが家かしらと涙を流したものだ。以下略...

(女性 大正12年生)

『企画展「織物の街に生きる」』

八王子市郷土資料館編 2000年より

現在、八王子はネクタイやマフラーなどの生地で全国有数の産地となっています。また、平成11年(1999年)には「Mulberry City」(桑の都)という新しいブランドを開発するなど、八王子の織物産業を支える努力が続けられています。

多摩織とは…多摩織は八王子やあきる野で織られている伝統的な織物。「お召織」「細織」「風通織」「変り綴織」「縷り織」の5種類をさします。草木染めなどの先染(織物を織る前に生糸に色をつけること)の織物で、おもな工程が手作業で作られ、国や都の伝統工芸品に指定されています。

しら調べてみましょう

ひとつのテーマについて調べる時、何冊かの本を調べることは、とても大切なことです。次にあげる参考文献は、図書館にある本の中で、小・中学生のみなさんにもわかりやすいものです。自分で調べ、まとめてみましょう。市内のどの図書館に所蔵しているかは館内OPACで検索、または職員へおたずねください。

※☆印のついているものは、特に小学生におすすめのものです。

☆『はちおうじの教育(パンフレット)』～シリーズ 八王子織物の歴史～

No. 31 桑の都 八王子織物の始まり

No. 32 激動と躍進の時代

No. 33 苦難を乗り越えて

☆『こども歴史シート』 八王子市郷土資料館／編

こどもから質問の多い事柄について、やさしくまとめたシート。

『企画展「織物の街に生きる」』 八王子市郷土資料館／編 2000年

織物の歴史から戦前の織物業の分業体制、関係者の聞き書きなどを、図版を多く使い解説しています。

『多摩織と八王子織物 織り方と歴史』

伝統的工芸品産業振興協会・八王子織物工業組合／編

『八王子の産業』 八王子市産業振興部／編 2004年

八王子の商業や工業の概略や統計を紹介。織物についても、その歴史や現在の様子、明治から現在までの生産高なども紹介しています。

●インターネット情報 (最終確認日2022年8月16日)

「八王子市役所 八王子織物の歴史」

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kankobunka/003/002/p005302.html>

編集・発行 八王子市中央図書館

平成22年(2010年)12月

令和4年(2022年)8月 改訂